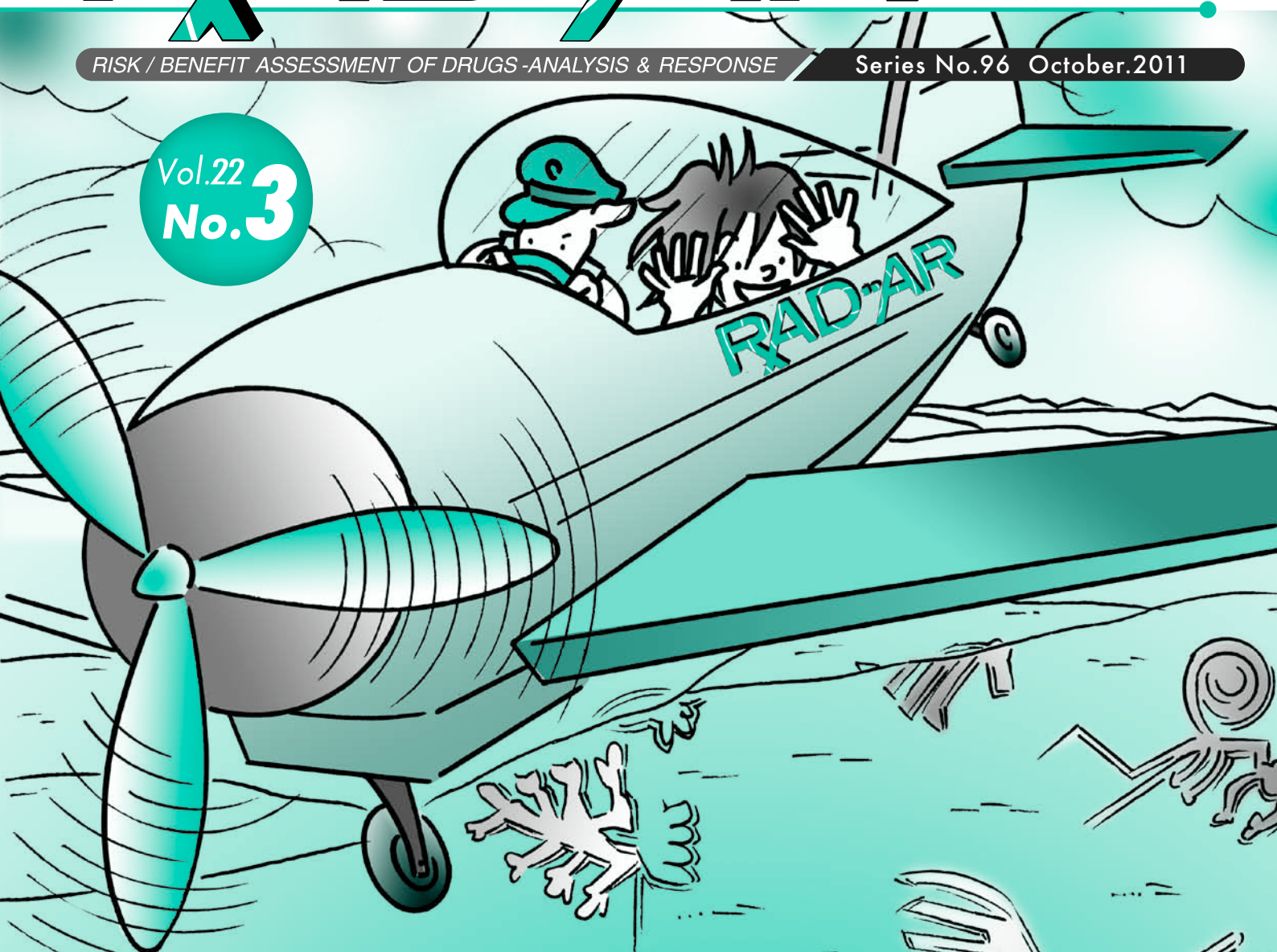


RAD-AR News

RISK / BENEFIT ASSESSMENT OF DRUGS - ANALYSIS & RESPONSE

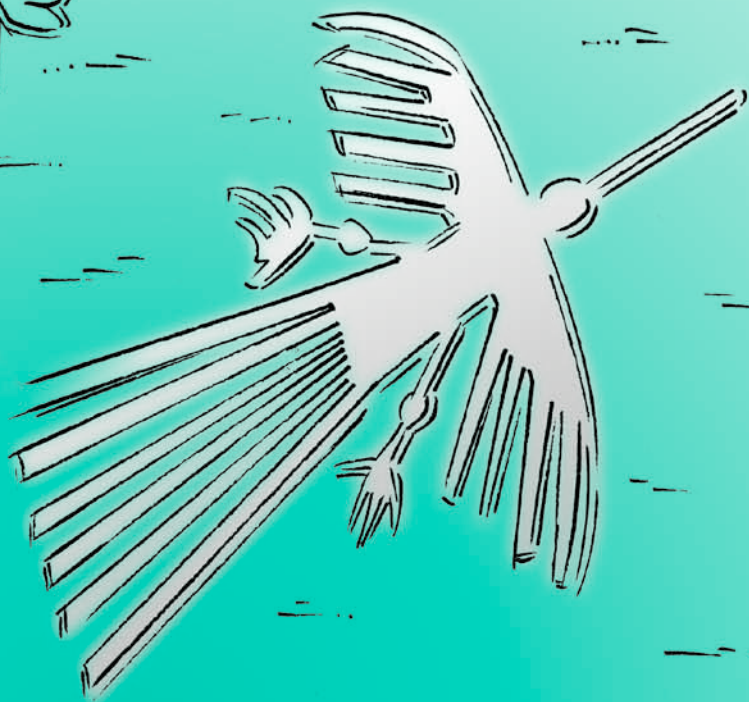
Series No.96 October.2011

Vol.22
No.3



C o n t e n t s

● 第38回通常総会会長挨拶	2
● 第28回理事会 / 第38回通常総会	3
● くすりの適正使用協議会に期待すること ～RAD-AR活動のあり方に関する検討会～	5
● 第1回 メディア勉強会を開催	6
● 薬剤疫学セミナー	8
Beginner Course 2011を開催しました!	
● ICPE報告(前編)	10
● 全国養護教諭研究大会くすり教育のブースを出展	11
● 「出前研修」で広がる学校のくすり教育	12
● 第14回医薬品情報学会学術大会 ポスター発表	14
● 特別講演	16
「土浦薬剤師会におけるブラウンバック運動の試み」	
● 第3回くすり川柳コンテスト作品募集	18
● 掲載紙(誌)/出版物紹介	19
● イベントカレンダー/編集後記	20



医薬品リテラシーの育成と活用を



くすりの適正使用協議会 会長

いさ お
大橋 勇郎

東日本大震災が起きて120日を超えました。先日のニュースでは釜石漁港でカツオ漁水揚げが報道され、その様子から復興の第一歩を感じて、日本中がほっとできるものでした。

また、医療においても津波によってすべてを失ったことに対してどう対応すべきか、大きな教訓を残したと思っています。例えば、診療のレセプトデータが厚生労働省に集められていますが、震災のような非常時に時限立法として使用が認められ、このレセプトデータが被災地での医療品供給を適時・適所にできるとしたら、情報社会の今日、国民のために役立つものとして評価されるべきものではないかと思います。

さて、本総会の議案にあります「中期計画」についてですが、この目的は次のように考えています。

つまり、医薬品の適正使用を啓発していく活動は、当協議会の設立当初より重要な柱となっており、設立から20余年たった今でもその必要性は増大しており、その活動の理念は変わっておりません。医薬品の安全対策はこの20余年に大いに進展し、新薬開発を進めている我々製薬企業においてファルマコビジランス、リスクマネジメントと万全な体制になってきております。しかしながら、これは医薬品提供側のことであり、医薬品を受け入れ使う患者さん側のことはどうでしょうか。

なお、きちんと使っていただかなければ医薬品の役割は果たせません。このためには社会が求めている医薬品リテラシーの育成と活用が必要です。

当協議会は、RAD-AR活動の理念に基づいてこの新たな活動を、もっと輪を広げて展開しようということが目的です。

この目的を達成するために、

- ①社会や医療環境に対応できる活動を長・中期的に検討する体制へ変更する
- ②新たな目標を共有し、参加するメリットを明らかにしていく
- ③賛同してもらえる輪を広げる

を進めていこうとするものです。

そしてその中心の核になるのはここにおられる20社です。

当協議会のさらなる発展を踏まえて、去る6月8日に会員社の皆様のご意見をお聞きする機会を設けました。そして20社のほぼ全員の方が、時間が過ぎるまで目一杯意見を述べていただき、力強く感じています。これらの意見を反映させてさらに実のあるものとしていく所存です。

詳細は、議案の中で海老原理事長が説明しますが、会員の皆様におかれましても企業市民の社会貢献活動として十分ご理解いただき、ご負担をかけますが、これまで以上に積極的な活動参加をお願い申し上げまして、総会の挨拶とさせていただきます。

(平成23年7月13日記)

くすりの適正使用協議会 第28回理事会/第38回通常総会

平成23年7月13日如水会館にて
第28回理事会および第38回通常総会が開催された。
「平成22年度事業報告」、「平成22年度決算報告」
および「中期計画」が審議され、
原案通り了承された。



第28回理事会

平成22年度 事業報告

人のQOLの向上に資する医薬品適正使用の推進を図るべく、事業を展開した。

薬剤疫学関連では「高脂血症治療用薬」データベース(約32,000症例)を構築した。

既にデータベースと併せ、約27万症例規模となったことから、確実性のある医薬品の適正使用につながる情報の創製・提供が可能となった。

コミュニケーション関連では、義務教育での「医薬品教育」の開始目前であることから、担当する教師がスムーズに授業ができることを願って精力的に「くすり教育」の徹底を図った。

くすり教育アドバイザーを充実させるとともに全国18ヶ所で養護教諭、保健体育教諭および学校薬剤師への研修を行った。

その他では、今日の医療・医薬品をとりまく情勢に対応し、協議会はどうに取り組むべきかについて10名の有識者の参加を得て、検討した。国民の「医薬品リテラシー」育成をテーマとし、それに沿った中期的目標を立てて活動すべきであるとの提言をいただいた。





平成22年度 決算報告

なお、本年度の事業は予定通り実行できた。さらに、経費の効率的な執行に努め、約500万円を次年度に繰り越すことができた。



第38回通常総会①



中期計画

設立から20余年経った今日においても、社会から“医薬品の適正使用を啓発する活動”は必要とされている。RAD-AR活動の理念『医薬品を正しく理解し用いることを通して、人の健康保持とQOLの向上に寄与する』の下、新たに“医薬品リテラシー*の育成と活用”という目標を掲げ、賛同者(会員)の拡大を見据えた社会貢献活動を展開していく。

そのために、中期的な視点に立ち、目標達成するために組織改革を行い、活動規模の設定、活動の集中と効率化に努める。

*医薬品リテラシー

医薬品の本質を理解し、医薬品を正しく活用する能力



第38回通常総会②

寄稿

くすりの適正使用協議会に期待すること

レーダー
「RAD-AR活動のあり方に関する検討会」を通じて

いまこそ、“抗がん剤リテラシー”を！

TBS報道局解説委員 小嶋 修一氏

2011年5月、『抗がん剤は効かない』という一冊の本が上梓された。著者は、放射線治療学が専門で、慶應義塾大学医学部の講師、近藤誠氏。氏によると「肺がんや胃がんなど固形がんでは、抗がん剤は大した効力がない」「固形がんが抗がん剤を標準治療とするのは間違い」だという。その理由として、臨床試験の結果を挙げ、「試験結果では、抗がん剤に延命効果は認められない。専門家たちは、臨床試験結果とは逆の結論を社会に向かって主張している」と断言した。

ご存じのとおり、近藤氏の主張は、今回初めて示されたものではない。論文や著作で、何度も提言されている。一方、製薬業界を含め医療関係者の間では、近藤氏の論文・著作が、これまでほとんど問題にされてこなかったようだが、このままで本当にいいのだろうか(註)。

がん医療に携わる医師からは、「患者さんに正しい情報を届けないと、医療現場は大混乱する」などと、危惧の念が寄せられている。がん専門病院のある腫瘍内科医は、「近藤さんの本や論文を読んだ患者さんが、実際に抗がん剤を拒否するというケースが出てきている」と証言している。きちん

と調べれば、こうした患者さんが全国で見られていることが明らかになるに違いないだろう。死期を早めかねないことだけに、他人事ではすまされない。

一方、抗がん剤治療のさじ加減をよく心得たエキスパートが行わないと、抗がん剤で命を縮めることになりかねないなど、近藤氏の主張にもうなずける点はある。

そこで、加盟社のオンコロジー部門をメンバーの核にして、この問題を検討・分析する検証チームを協議会内に作り、抗がん剤を理解するために必要な情報を、国民へ是非届けてほしい。そのためには、多くの腫瘍内科医や関連学会の協力も欠かせない。もちろんメディアとしても、是々非々で判断して、協力すべきところは協力していきたい。

もう一つ。私は昨秋、専門医らとともに「精巣腫瘍患者友の会」を立ち上げた。抗がん剤は、がん種ごとに異なる作用をするが、私も経験した精巣腫瘍は、抗がん剤と相性の良い固形がんの代表である。しかし、希少がんであるがゆえに、そうした情報は患者さんに届きにくい。希少がん向けの細やかな抗がん剤情報も、いま、求められている。

(註) 近藤理論の功罪については、「がんサポート」10月号(エビデンス社)に筆者による小論が掲載される予定なので、参照されたい。

次号Vol.22-4へ続く

なお、「RAD-AR活動のあり方に関する検討会」の詳細は
くすりの適正使用協議会ホームページのTOPICSをご覧ください。

<http://www.rad-ar.or.jp/>

第1回 メディア勉強会を開催

コミュニケーション部会

広報委員会 横澤 祥文

7月5日(火)、東京都内において、「くすりの適正使用のために 今、知りたい、薬のリスクとベネフィット ～東日本大震災の事例とメディアに期待する役割～」をテーマに、29名の報道関係者の出席のもと、第1回メディア勉強会が開催されました。



メディア勉強会は、一般市民のドラッグリテラシーのさらなる向上を目指し、下記を目的として、今年度全3回の予定で開催するものです。

1. 医療・健康・生活の担当記者に「くすりの適正使用」について学んでいただく場を提供する
2. その結果として、くすりに関する医療・健康などの報道の質の向上を目指す
3. さらに、「くすりの適正使用協議会」の役割・活動を、記者に認知・理解いただく

第1回目の今回は、岩手県薬剤師会専務理事熊谷明知氏と東京大学大学院薬学系研究科教授(医薬品情報学講座)澤田康文氏のお二人にご講演いただき、また、ファシリテーターとして江戸川大学メディアコミュニケーション学部情報文化学科教授中村雅美氏に解説いただきました。

開催に先立ち、当協議会の海老原理事長から、「今回の東日本大震災を機に、自分がどういう薬を飲んでいるのか初めて知ったという人も多く見受けられた。薬の服用は、他人事にせず、自分事にすることが大切になる」とのあいさつがありました。

続いて熊谷先生から「岩手県薬剤師会の東日本大震災への対応～被災地域の薬剤師の活動を中心に～」と題したご講演をいただきました。

沿岸地域の薬局の多くが被災するという状況の中、被災地における薬剤師の活動とその経験に基づいた「くすりの適正使用」の重要性について、熊谷先生は、薬が津波で流されてしまい、普段飲んでいる薬がなかったり、分からなかったりして苦労した人が多く、「こうした人に薬を提供する際に大き

な役割を果たしたのが、「おくすり手帳」であり、的確な処方をする事ができた」と、「おくすり手帳」は災害時に大きな力を発揮すると説明されました。「釜石市では、慢性疾患の薬を届けるとの思いから、震災の翌日から薬を被災者に提供。明かりのないところで調剤したり、服薬指導を行っていた」こと、また、「おくすり手帳を持っていない患者さんに対しては、新たに手帳を作成し、くすりの管理に努めた」ことなど、薬剤師の迅速な対応を紹介されました。

中村先生からは、「おくすり手帳を常時携帯することの必要性を今後も訴えていくべきと感じた」などのコメントをいただきました。

続いて、澤田先生からは、「くすりの適正使用に及ぼすマスメディアの効果、情報のインパクト」と題しご講演いただきました。澤田先生は、くすりが適正に使用されるために、一般の人々が順守すべきこと、そしてそのためにメディアが果たす役割などについて、実際の報道事例などをもとに説明されました。

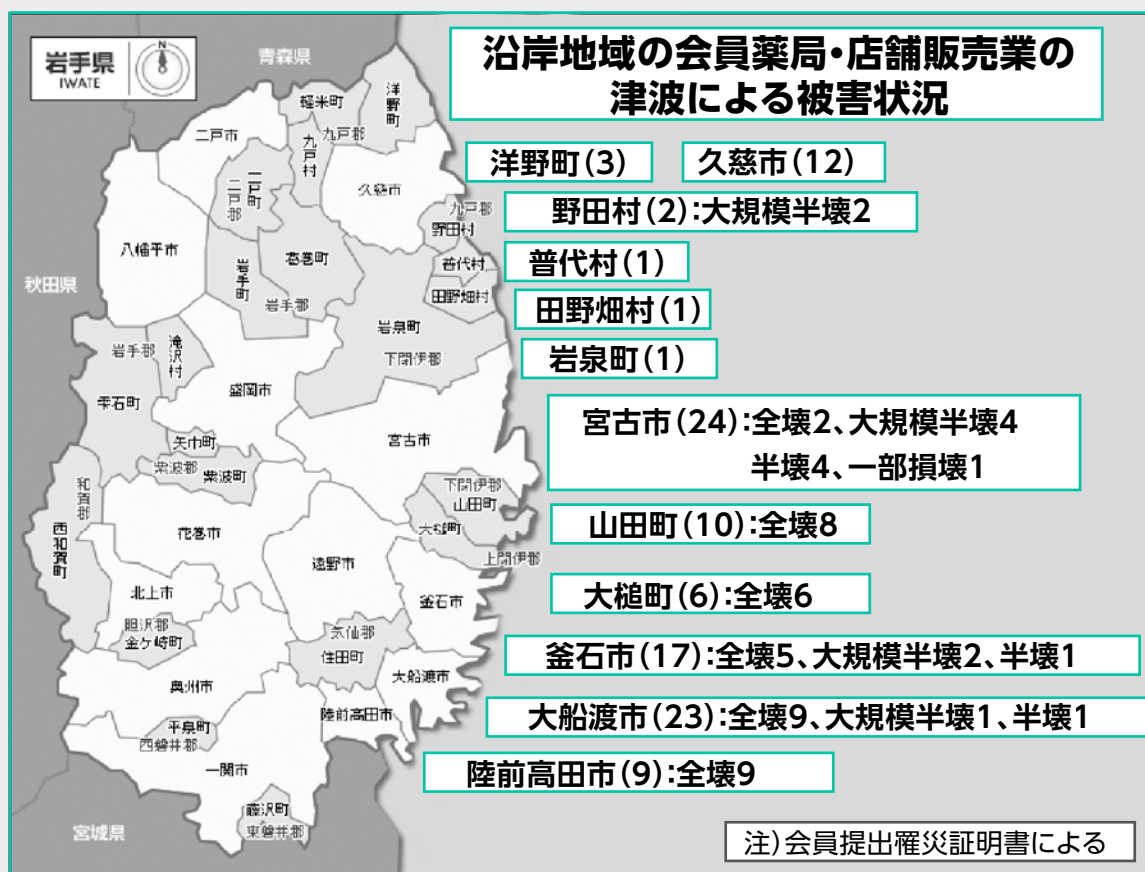
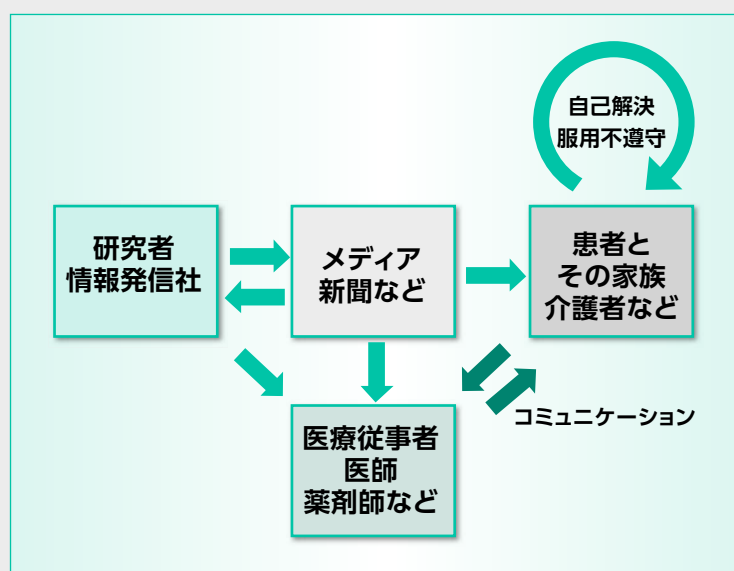
「某全国紙に、高齢者が避けた方がよい薬という記事が掲載された。患者さんは、その記事を医者に見せて自分が飲んでいる薬が大丈夫であるかを確認した。これは、医療関係者とのコミュニケーションを強化する良いきっかけになる。一方、この記事に名前が記載された薬剤を処方されていたある患者さんは、心配になり医師に不安を訴えた結果、別の薬剤に処方変更せざるを得なくなった。記事の元になった研究発表では、「ある用量を超える場合には避けることが望ましい」と記載されていたが、新聞記事には薬品名のみが記載され、用量に関する言及がなかった」ことを紹介され、紙上の不十分な情報により、誤った理解を与えることがあること、さらに、「新聞記事は、薬の注意を呼びかけるだけでなく、医師と患者の双方をつなぐブリッジの役割を果たし、そのやりとりは医師からの一方通行ではなく双方向になる。このインパクトをもっと認識すべきである」と述べられました。

また、災害時の薬の情報管理についても「薬の情報を二元管理することを推奨したい。例えば、子どもや孫に自分の薬の情報を管理してもらったり、遠くで暮らす親戚に薬の情報を渡したりすることなどが必要だ」と言及されました。

その後の質疑応答では、全国紙の記者から、「限られた紙面の中で副作用について伝える場合は、専門家に確認するとともに、医師・薬剤師に相談すべきである旨を必ず記載する必要がある」との発言がありました。

また、参加者に対するアンケートでは、「くすりの適正使用という視点から震災で起こった問題・課題を再確認することができた。メディアとして省略してしまいがちな最後の一言の重要性について改めて考えさせられた。次の勉強会も楽しみにしている」、「新しい技術や啓発疾患に報道が偏る傾向の中、「メディアの役割の重要性」という新しい視点で、薬の適正使用という重要なテー

マに関する取材ができ大変良かった」、「協議会のことはピクトグラムの活動など以前より知っている。「くすりの適正使用」は読者も関心が高いトピックなので、今後も積極的に情報発信してほしい」等の意見が寄せられ、今後のメディア勉強会と当協議会の情報発信に対する期待が窺えました。



薬剤疫学セミナー 2011

Beginner Course

薬剤疫学部会
薬剤疫学普及セミナー委員会



東京会場

薬剤疫学は医薬品のリスク・ベネフィットを評価する手法として、欧米を中心に発展してきました。欧米の規制当局も製薬企業に対して、必要に応じて薬剤疫学を活用するようガイドラインで勧めています。日本では、厚生労働省が2011年4月20日から10月31日の間で「医薬品リスク管理計画(RMP)ガイダンス(案)」に関する意見募集を行っています。このガイダンスでは、医薬品の安全性検討事項を評価する手法としてコホート研究、症例対照研究等の薬剤疫学研究の実施が想定されています。製薬企業など関係者の皆

さんにとっては、今後ますます注目される分野ではないでしょうか。

くすりの適正使用協議会は、1989年設立当初から薬剤疫学の普及に努めてきました。その活動の一環として、今年も「薬剤疫学セミナー Beginner Course」を東京と大阪で開催しました。今年は厚生労働省からのガイダンス案が公表されたためか、昨年よりも参加者が増え、また、製薬企業から委託を受けているCRO(受託臨床試験機関)の方、医療機器メーカーの方も参加されていました。

セミナーの概要

東京:7月7日(木) 大阪:7月14日(木)

● 内 容

医薬品安全性監視(Pharmacovigilance)
疫 学
薬剤疫学／症例報告／症例集積検討
コホート研究
ケース・コントロール研究
ネステッド・ケース・コントロール研究

● 特別講演

「製造販売後観察データの徹底活用
—適正使用に向けた医薬品情報の構築へ—」
名城大学薬学部 教授 後藤 伸之

● 講 師

- 小林 俊光(アステラス製薬株式会社)
- 下寺 稔(MSD株式会社)
- 大道寺 香澄(エーザイ株式会社)
- 明山 武嗣(キッセイ薬品工業株式会社)
- 武部 靖(日本新薬株式会社)
- 澤田 興宏(田辺三菱製薬株式会社)



大阪会場

セミナーの内容

Beginner Courseは市販後安全管理業務の経験が比較的浅い製薬企業の方々を対象に、薬剤疫学の入門という位置づけで行っています。まず薬剤疫学の必要性和頻出する専門用語を解説し、その後、薬剤疫学研究で用いられることの多い研究デザインとその事例を紹介しました。

特別講演では、名城大学薬学部医薬品情報学研究室・後藤伸之先生から、市販後の観察研究で得られる情報にはどのようなものがあるのか、実際に起きた事例やデータを紹介していただきました。

Q & A

1. 米国のリスク最小化戦略 (REMS) の作成時期と対象となっている医薬品数を教えてください。

承認段階でREMSの作成が必要と判断された医薬品について、FDAが企業に作成を指示します。2010年10月時点で156製品についてREMSが作成され、具体的には、 Medikationガイド(153製品)、コミュニケーションプラン(43製品)などがREMSに盛り込まれています。最新情報はFDAのウェブサイトでご確認ください。

2. 分析疫学の手法に対して、症例報告の意義はどのようなものがあるか教えてください。

分析疫学は既存のリスクもしくは疑われるリスクの検証を目的に行われます。それに対して症例報告では新たなリスクの発見につながるような仮説の生成が可能となります。

参加者の声

- 事例をふまえての研修で非常にわかりやすい。ポイントごとにまとめや復習があったので、理解の助けになった。
- テキスト(市販されているもの)などで自習できるレベルの内容だったが、一日で概観を習得、復習することができた。
- 安全性情報にかかわっている担当者の経験年数も異なる。セミナーは経験者にとってはベースの見直し、経験が浅い者にとってはレベルアップのツール、きっかけになると思う。
- 各研究デザインについて、なぜその手法を用いるのか、どんな時に最適なのか、などの説明が非常に駆け足で、かみくだいて理解する前に次へと進んでしまったように感じた。
- FDA、EMAに続けとばかりに日本でも本分野の研究は活発になると思う。
- 最後の特別講演で気持ちを新たにすることができた。

研究デザインの特徴

比較項目	ケース・コントロール	ネステッド・ケース・コントロール	コホート
研究の向き	後ろ向きが多い	前向きが多い	前向きが多い
かかる時間	短	長	長
費用	安い	安い	高い
観察期間長いもの	向き	不向き	不向き
稀な有害事象	向き	不向き	不向き
発生率の計算	不可	可	可
曝露と有害事象発生の時間的関係の評価	難	可	可
バイアスの影響	受け易い	制御可	制御可
曝露と有害事象	1つの有害事象について複数の曝露因子の影響を評価可能	1つの有害事象について複数の曝露因子の影響を評価可能	1つの曝露で複数の有害事象を評価可能

ICPE報告(前編)

27th International Conference on Pharmacoepidemiology and Therapeutic Risk Management in CHICAGO

薬剤疫学部会

日本新薬株式会社

神浦 俊文

くすりの適正使用協議会 事務局

野村 香織

ビル群とシカゴ川

2011年8月14～17日に、国際薬剤疫学会(ISPE)主催による第27回薬剤疫学&リスクマネジメント国際学会(ICPE)がシカゴで開催された¹⁾。今号と次号にわたり、学会の様子を報告する(図1)。

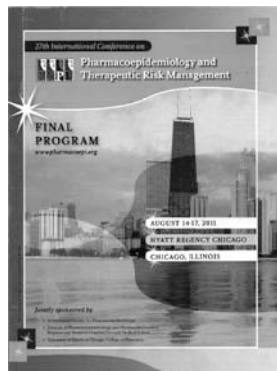


図1 学会プログラム

国際薬剤疫学会が毎年開催しているICPEは、薬剤疫学の研究者のほか、製薬企業や規制当局関係者などが参加している。本大会には25カ国から1,100人以上が参加し、870の要旨の提案があった。口頭発表180題、ポスター

発表600題のうち、日本からの発表は口頭発表2題、ポスター発表13題であったものの、医療情報の二次利用が進んでいる韓国や台湾よりも発表数は少なかった。日本でも薬剤疫学研究に利用可能な大規模データベース(以下DB)の整備が徐々に進んでおり、今後の研究の推進が期待される(図2)。

くすりの適正使用協議会では、ポスター発表で、2011年3月に構築した高脂血症用剤の使用成績調

査等DB²⁾の概要の紹介を行ったが、残念ながら質問者は少なく、DB構築への関心は低いように感じた。海外では、既に大規模DBが構築されていることがその一因と思われる。その一方、カルシウム拮抗剤服用中の患者におけるCYP3A4阻害剤併用時の影響について、降圧剤の使用成績調査DBを用いて研究した2006年のポスター発表³⁾の配布資料を持って帰る方が多くみられ、使用成績調査DB自体への関心はあるように思われた。

また、明治薬科大学赤沢氏らの研究グループから、降圧剤の使用成績調査DBを利用した研究について口頭発表があった。DBには医薬品の投与開始日と投与終了日があり、投与期間を計算することができる。研究グループでは、高齢者を対象に、患者ごとに単剤、2-4剤、5剤以上に分けて服用期間を計算し、副作用の発生との関連性を検討した。65歳以上の患者40,890人のうち、副作用が起きたのは2,202人(5.4%)であった。2-4剤併用している期間の副作用の発生率は4.09/1,000人・日、5剤以上の場合6.63/1,000人・日だった。年齢・性別などで調整した後のハザード比は、2-4剤の場合1.74(95%CI 1.71-1.76)、5剤以上の場合2.80(95%CI 2.75-2.85)となり、多剤併用は独立した副作用発生の要因となっていることが示唆される研究報告だった。

次号では、教育セッションや基調講演、シンポジウムについて報告する。

● 過去のICPE情報報告は、以下をご参照ください。

http://www.rad-ar.or.jp/01/08_icpe/08_icpe.html

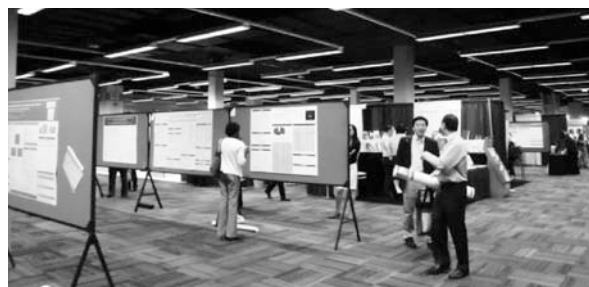


図2 ポスターセッションの様子

参考資料

- 1) 27th ICPE: International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management. <http://www.pharmacoepi.org/meetings/27thconf/index.cfm>
- 2) くすりの適正使用協議会. 2011. 高脂血症用剤の使用成績調査等データベース構築報告書. http://www.rad-ar.or.jp/01/05_database/paper/hyperlipid-report_2011.pdf
- 3) 小菅 美樹仁, 北村 重人. 2006. 第22回 国際薬剤疫学会Report ⑤ポスターセッション. http://www.rad-ar.or.jp/01/08_icpe/22th-icpe/22icpe5.html



全国養護教諭研究大会 くすり教育のブースを出展

コミュニケーション部会 啓発委員会

くすりの適正使用協議会(以下、当協議会)啓発委員会では、くすり教育の周知・啓発活動の一環として、2011年8月4日に佐賀市文化会館で開催された「平成23年度全国養護教諭研究大会」(以下、研究大会)にて、くすり教育教材のブースを出展しました。

はじめに

今回の研究大会は「21世紀を担う子どもたちが、生涯を通して心豊かに健康で生きるために、自ら学び・考え・判断して、主体的に行動できる資質や能力の育成を図ることを目指し、養護教諭の支援や連携やあり方、学校における健康教育の推進する」ことをテーマに開催されました。

当協議会では、幼いころからくすりの正しい知識を学ぶことで、「生涯を通して自分の健康と病気の治療に役立てることの出来る力を養う」という理念の下、2000年からくすり教育の啓発活動に取り組んでいます。この活動理念と研究大会の趣旨が合致し、今回の出展に至りました。

学校でのくすり教育と協議会の現場支援活動

平成24年度から中学校の保健体育の時間に「医薬品の正しい使い方」の学習内容が新たに加わります。医薬品の教育の完全実施まで1年を切り、既に医薬品の教育を先行実施している学校もありますが、これから準備を考えている先生方もいらっしゃると思います。

当協議会は、くすり教育の指導者を対象に教材開発(パワーポイントスライド作成等)や教材の無償貸出、出前研修会などを行っていますが、新学習指導要領に新たに医薬品の教育が追加されたことで、今まで以上に教育現場を知ることの必要性を感じています。

研究大会でのブース出展は、教育現場の先生と情報交換をしながら「生の声を聞ける」大変貴重な場でもあります。

○ *平成23年度全国養護教諭研究大会の趣旨など詳細は、以下をご参照ください○

http://www.pref.saga.lg.jp/web/kurashi/_1018/ik-houisen-kouhou/_53511.html

養護教諭は子どもたちのくすり相談役

「ちょうどこんな教材を探していたのよ!」、「保健体育の先生に相談されて、どうしようか考えていたの」、「医薬品となると専門的な知識がないので不安で…」。

先生方に資料を配布する際に聞かれるこのような声の背景には、養護教諭が子ども同士のくすりの貸し借りを目の当たりにし、子どもたちにくすりの正しい使用についてどのように指導したら良いのかなど、先生方がくすり教育の必要性を常日ごろ感じているという事実があります。

特に今回の研究大会では、来年から医薬品の教育が完全実施となることもあり、たくさんの方にブースを訪れていただき、用意した300セットの資料は開始早々になくなりました。

まとめ

「くすりは飲まなくてすむなら、その方が良い」です。しかし、セルフメディケーションを行ううえでは、時としてくすりを使わなくてはならないこともあります。「くすりは正しく使用してこそくすり」です。当協議会では、今後も、幼いころからくすりの正しい知識を身に付けることの大切さを啓発していくとともに、新たな教材開発や現場支援に引き続き力を注いでいきます。



「出前研修」で広がる学校のくすり教育

コミュニケーション部会 啓発委員会

来年度からくすり教育が全国の中学校約1万校で始まることを受け、日本各地の教育者が準備に取り組んでいます。当協議会が2007年から始めた教育者対象の「出前研修」は、年々増え、特に今年度は要望が多く例年に類を見ません。一人の学校薬剤師による「教材をどう使うのか教えてほしい」という問い合わせから始まった当協議会の出前研修の、「今」を報告します。



■当協議会が行う出前研修とは

「では、グレープフルーツジュースの入った試験管に重曹を入れてください。すると・・・?」

先生役を務めるくすり教育アドバイザーの指示に、生徒役の養護教諭が恐る恐る重曹を加えると、一瞬のうちに泡が試験管から溢れ、みるみる生徒役の顔が驚きの表情に変わる…これは当協議会が行う出前研修の1シーンです。

この出前研修は、2007年春、ある学校薬剤師から「協議会のホームページ(以下、HP)に掲載されている教材の使い方を当地の研修会で説明してもらえないか?」と依頼されたのがきっかけでした。以前より、児童・生徒へのくすり教育が行われていないことを憂いていた当協議会では、2002年からその教育者に向けた教育プログラムや教材を開発し、HPで公開しています。これは、児童・生徒に直接教えていくよりも、教育者にプログラムや教材を提供する方が、より地域や学校で継続的な取り組みに繋がるとの考えからです。

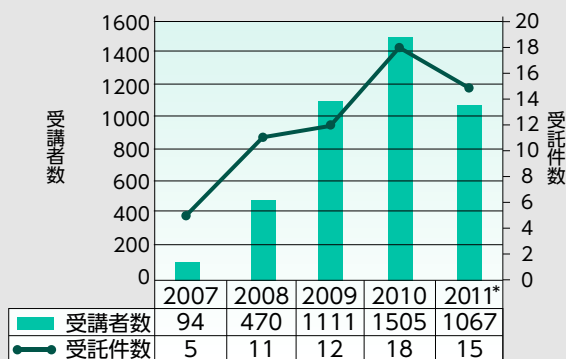
その後、くすり教育を取り巻く環境は大きく変化しました。2008年には、中央教育審議会から、医薬品の教育を中学校で新規追加し、現在高等学校で行われている内容を更にレベルアップすべきと答申され、実際に来年度からは中学校で教えられることになります。一方で昨年2009年には、一般用医薬品の販売制度の変更を主な内容とする改正薬事法が施行され、医薬品を一般市民がより入手しやすい環境へと変化しました。

このような環境変化の中、くすり教育が必要と肌で感じていた学校薬剤師、養護教諭に加え、学習指導要領におけるくすり教育で教鞭をとる保健体育教諭も、くすり教育実施担当者の主な一員となりました。当協議会はこれら教育者からのニーズに応え、研修内容を改善しながら、現在まで計57回に亘り約4,000名以上の教育者に対し出前研修を行ってきました。

講師は当協議会が認定する「くすり教育アドバイザー」であり、21名(2011年9月現在)の講師陣が毎回2名ペアで全国に赴いています。

また研修内容は、文部科学省の調査官や教育の専門家の意見も定期的に聞き、より正確、より役立つ内容になるよう、様々な視点を考慮しています。

これまでの出前研修受託回数



*2011年度の数値は年度前半(10月末)までの実施予定定分。

くすり教育出前研修の基本内容

- ①くすり教育を取り巻く背景
- ②医薬品の基礎知識(学校薬剤師除く)
- ③授業の一例
- ④授業の組み立て
- ⑤教材紹介

※研修時間は約2時間程度

※費用:講師謝礼なし、講師旅費と資料代のみ

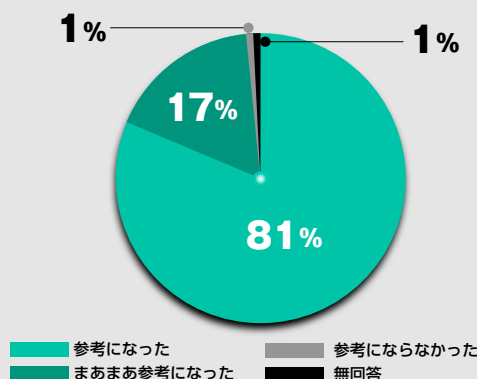
■出前研修の評価

出前研修の反響はどうでしょうか? 当協議会では毎研修会後アンケートを行っていますが、各パートの中で最も関心が高いものが「授業の一例」であります。

冒頭で紹介したように、授業の一例では、当協議会のアドバイザー2名が先生役と学校薬剤師役を務め、受講者を生徒役に見立てて実際の授業のデモンストレーションを行っています。その中で、医薬品の正しい使い方を理解いただくために各種実験を行ったり、主作用・副作用、用法・用量を理解いただくために教具(「薬の運ばれ方」や「薬の血中濃度」のパネル)の活用例を示したりしています。

実際に授業を主体的に進める立場の教諭(保健体育教諭や養護教諭)からは、「教具の具体的な使い方が分かってとても参考になった、自分で授業を組み立てる時の参考になる」というコメントが、また、学校薬剤師からは「どうやって中学生レベルに噛み砕いて説明したら良いのかわかった、自分でもできそうだ」などのコメントが多

授業の一例は参考になりましたか？



2009年度～2011年度出前研修アンケート回答者1,831名の集計結果より

く寄せられています。

また、同じく教諭の関心が高いものが「医薬品の基礎知識」です。「1つ教えるには、10の知識が必要。研修を受けた今なら、自信を持って子供たちに教えられる」とのコメントは、研修によりこれまで医薬品について体系的に学ぶ機会のなかった、学校教諭らの不安解消の一翼を担うものと思われます。

■出前研修から広がるくすり教育

実施した出前研修はその後、各地でどのような取り組みに繋がっているのでしょうか？ 一例として2008年に
出前研修を行った裾野市養護教諭部のくすり教育を紹介します。

裾野市では、出前研修をもとに養護教諭部がくすり教育の統一学習指導案を作成、学校薬剤師会などの協力も得て、2009年からは市の全小中学校を対象に薬学講座の一環として行うようになりました。小学校3年生では基礎的なくすりの飲み方を、中学校1年生では「主作用・副作用」や「使用回数・使用時間・使用量」を学びます。養護教諭が授業の進行役を務め、専門的な部分は学校薬剤師が実験や模型を交えて説明するスタイルを取っています。指導案は毎年改良が重ねられており、当協議会が企画した出前研修がきっかけとなり市全体の取り組みに繋がった例です。



裾野市立須山中学校でのくすりの授業の様子(2010年)

■講師「くすり教育アドバイザー」に聞く、くすり教育の意義と感触

2008年からくすり教育アドバイザーとして活躍し、現在はリーダーも務める大内良宏氏にインタビューを行いました。

Q:2008年から活動してきて感じることはどんなことでしょうか？

A:研修当初は「自ら授業を実施する」と考えている聴講者は少なく、くすり授業に対し第三者的な雰囲気が強かったが、最近は「くすり授業をぜひ実施してみたい」という聴講者の熱気を強く感じます。

Q:どうしてアドバイザーになりましたか？

この活動のどんな部分に意義を感じますか？

A:くすりの教育を受けた記憶がない大人の多さに驚いたことと、昔はおばあちゃんが孫に伝えていた、昔から伝わる食べ合わせや、ちょっとした病気の知識が、核家族になり伝承されなくなったことで、くすり教育の大切さを改めて感じたのがきっかけです。

Q:講師を務めるうえで達成感を感じるのはどんな時ですか？

A:「研修を受けて授業してみる自信が出ました」と言っていた時や、「悩んでいた問題が解決しました」など、くすり教育の意義が伝わったと感じた時です。

Q:逆に苦勞するのはどんな時ですか？

A:毎回聴講者のニーズやモチベーションが違うので、会場の雰囲気や反応を見ながら、説明の仕方や進め方の工夫をしなければならない点です。

■くすり教育にかける想い

当協議会は主に製薬企業で成り立っている団体です。これまで「教育」という分野に踏み込む活動について「くすりを売りたいのではないか、利益目的では」と拒否された経験もありますが、あえて「教育」に取り組むには理由があります。

製薬企業は人々の健康を願ってくすりを創っています。くすりは人体に働きかけ様々な病気や怪我の治療に貢献しますが、使い次第では人体に悪影響を及ぼすことにもなりかねません。この点を最も理解しているのもまた、製薬企業です。それゆえに、常に用法・用量や副作用などの情報とくすりをセットで医師や薬剤師の元に届ける一方で、その先のくすりを使う人々自身に、くすりの基礎的な知識を、何故守らなければならないことがあるのかを、伝えなければと思っているからです。

そして、「くすりは正しく使ってこそくすり」…この気持ちが少なからず伝わったからこそ、現在、出前研修の要望が増えているのではないかと思います。出前研修を受講した教育者に一人でも多く、くすり教育を行っていただくことで、子供たちが医薬品適正使用の第一歩を身に付けることに繋がればと考えています。

くすり教育に関するご要望がございましたら、以下に問い合わせいただければ幸いです。

くすりの適正使用協議会 くすり教育担当
TEL:03-3663-8891 FAX:03-3663-8895
MAIL:info@rad-ar.or.jp
HP:http://www.rad-are.com

注射剤のくすりのしおり®について

— 第14回医薬品情報学会学術大会 ポスター発表 —

コミュニケーション部会 情報委員会

平成23年7月23～24日に東京にて第14回日本医薬品情報学会が開催され、当協議会からは昨年の電話相談に関する口頭発表に引き続き、今回はくすりのしおり®に関するポスター発表を行いました。

はじめに

患者さんと医療関係者とのコミュニケーションツールとして1995年に考案されたくすりのしおり®は、2010年12月には10,000以上の内服・外用・自己注射薬の医薬品に対して作成されています。くすりのしおり®そのものが患者さんの手元に届かないまでも、薬剤師が服薬指導の参考として利用し、薬学部の教科書で紹介され、一般向けの医療情報サイトなどで活用されています。

注射剤のくすりのしおり®については、対応している医薬品数も少なく、医療現場での利用の実態がわかっていませんでした。そのため、2009年に病院に勤務する薬剤師を対象としたアンケート調査を行い、この結果を、2011年7月23-24日に開催された第14回医薬品情報学会学術大会で発表しました。

注射剤のくすりのしおり®

外部の医師2名、薬剤師2名の専門家を含む専門委員会の結果を踏まえて、2003年9月に注射剤のくすりのしおり®「作成基準」が定められました。これにより作成を開始し、2009年6月時点で約900種類ありましたが、内服・外用・自己注射の医薬品と比べると数が少なく、医薬品ごとに記載にばらつきが認められていました。そこで、多くの医療関係者に利用していただくためには、より多くの医薬品を網羅し、内容が適切で迅速に更新される必要があると考え、2009年に注射剤のくすりのしおり®の改善の検討を開始しました。

注射剤のくすりのしおり®に関するアンケート

この検討に先立ち、注射剤のくすりのしおり®の利活用について現状を把握するため、2009年5月に、病院に勤務する薬剤師を対象に、オンラインアンケートを実施し200名から回答を得ました。57%

(114人)がくすりのしおり®を日常業務で利用し、そのうち38%(43人、全体の22%)が注射剤のくすりのしおり®も利用していました。全体の85.5%(171人)、注射剤の利用者の93%(40人)が注射剤のくすりのしおり®は必要であるとの認識でした。利用する理由は「在宅での投与や入院時の説明に有用」「患者さんへの説明の仕方などは、素人にわかりやすく書かれているので、そのまま使わせてもらうことができる」、一方、利用しない理由は「病棟業務がないなど実務で注射剤について説明する機会がない」「全種類は不要」「製薬企業などのほかの資材で情報が間に合っている」といったことが挙げられていました。用法・用量の情報が最もよく利用され、次いで副作用の情報が利用されていることが分かりました。

くすりのしおり®の今後

アンケート結果に基づく検討の結果として、当協議会では注射剤のくすりのしおり®の作成基準を見直し、内服・外用・自己注射剤のくすりのしおり®との整合を図りました。くすりのしおり®を作成している製薬企業各社に周知し、2012年から統一された作成基準で運営していく予定です。

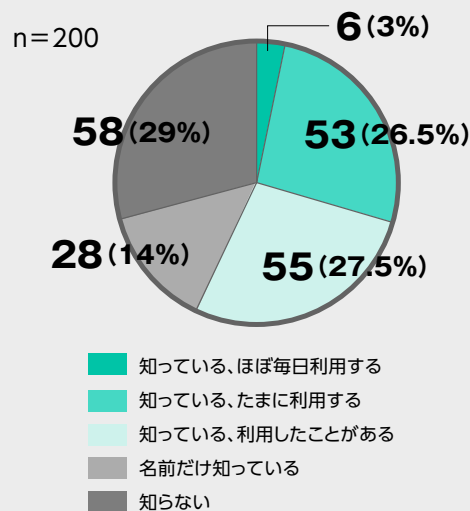
なお、くすりのしおり®のコンセプトは「医療関係者と患者さんとのコミュニケーションツール」であり、専門家向けの参考資料とは異なります。しかしアンケート結果から、このコンセプトがいまだ十分浸透していないことが窺えましたので、学会や出版物などを通じて繰り返し情報提供していきたいと当協議会では考えています。また、注射剤のくすりのしおり®の網羅性や品質の向上に努め、患者さんと医療関係者とのパートナーシップ(コンコórdانس)のためのくすりのしおり®活用方法について、医療関係者の皆さまの意見をもとに検討し、コミュニケーションツールとしての有用性への理解を得たいと考えています。

日本医薬品情報学会学術大会について

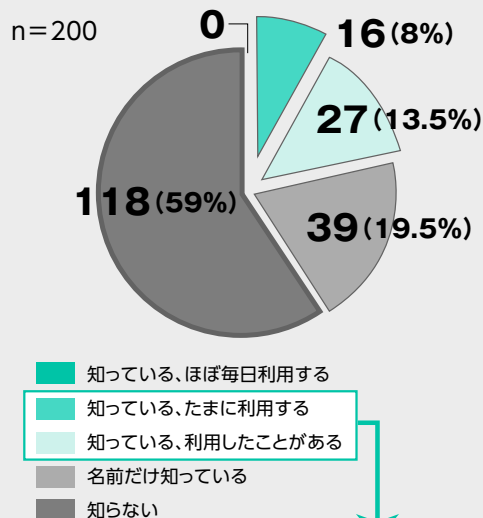
今回の学術大会では「医療を俯瞰する医薬品情報学」というメインテーマが掲げられ、これまでの研究成果を実践的な医薬品情報につなげ、社会に安心・安全な医療を提供するための幅広い議論が求められました。本学会では、医療現場が求める医薬品情報とは、医療者や患者さんの行動を変える力を持った情報であり、単に情報の収集、評価、加工、提供で完結ではなく、その情報が活用された成果で評価されるものであると説明されていました。

また、シンポジウムでは、当協議会でも取り組んでいるテーマでもある「コンコダンスに生かす医薬品情報」が取上げられ、医薬品適正使用のための医薬品情報のあり方についてリスクコミュニケーションの観点からお話がありました。治療について説明する際には、可能な限り正確な数値によるリスク情報と共に、その治療の必要性や有用性を患者さんと医療者で共有することが望まれるとのことでした。①コンプライアンス(強制的) ②アドヒアランス(患者さんに考える機会を与える) ③コンコダンス(医師と患者さんが合意したうえでの診療)、それぞれの用語の意味合いを中山健夫先生(京都大学)が簡潔に説明され、コンコダンスの概念が最も医薬品適正使用の実現につながるものと言及されていました。欧米では先行しているコンコダンスへの日本の薬剤師における取り組みは、抗がん剤の外来化学療法 of 安全管理におけるアドヒアランスの向上等、実践されている事例が限られていること、また、無関心や理解不足により生じるワクチン接種コンプライアンス低下に対し、患者さんの理解と意思決定を促すためコンコダンスへの移行が重要であることなどのご意見がありました。

●くすりのしおり®認知度



●注射剤のくすりのしおり®認知度



利用経験のある
薬剤師は43名(約22%)

注射剤のくすりのしおり®を利用する機会のある薬剤師の先生方からのコメント例

- 今後は抗がん剤などの説明も多くなり、また在宅中心静脈栄養法などを行う患者さんも増えてくるだろう
- 入院中は内服薬よりも注射薬を使うことが多いので、患者さんに説明しなくてはならない。患者さんも興味を持っているので、説明しなくてはならない。特に抗がん剤などについてもくすりのしおり®があると便利である
- 注射の説明をする際に、患者さんや患者さん家族に分かりやすく説明をするのに必要。分かりやすくまとまっているので説明しやすい
- インターネットで簡単に情報が得られるのが便利である(検索・印刷ができる)

土浦薬剤師会におけるブラウンバック運動の試み

1980年代のアメリカで、ある患者さんが茶色の紙袋に服用薬を入れて薬局に持参し、「飲み合わせの副作用がないかどうか調べてほしい」と依頼した。これが『ブラウンバック運動』の由来となり、アメリカ、イギリスなどでは大規模な調査も行われている。日本でのテストケースを行った土浦薬剤師会の調査結果を聞く。



茨城県薬剤師会理事
土浦薬剤師会 会長
金澤 幸江氏

処方薬とOTC・サプリメント類の併用調査報告

～土浦薬剤師会の活動から～

PROFILE

かなざわ ゆきえ

昭和50年 東京理科大学薬学部薬学科を卒業して東京田辺製薬株式会社に入社、研究開発本部に勤務。昭和63年 調剤薬局を運営するメディカルファーマシーへ入社。平成8年に有限会社ワイツファーマを設立し、茨城県と北海道にて6店舗を経営。平成16年 茨城県薬剤師会土浦支部支部長に就任、平成18年には茨城県薬剤師会理事に就任。

● 41名の薬剤師が調査に参加 ●

茨城県薬剤師会を母体とする土浦薬剤師会は152名で構成され、霞ヶ浦を中心とした4市町村(土浦市・かすみがうら市・阿見町・美浦村)を担当しています。地域には中核病院である土浦協同病院があり茨城県全域をカバーする救急医療体制ができています。また産科・小児科の医療機関も多数あり、一時問題になった患者さんのたらいまわしなど全くない、医療福祉体制が大変充実している中で活動しています。10年前には「くすりは医者から」「薬剤師は必要か」と言われたこともありましたが、「地域に根ざした薬剤師会でありたい」との信念を軸に地道な活動を続けた結果、現在では休日・夜間の対応にも薬局がかかわることが当然となるなど、地域連携活動にも積極的に参加しています。

このような中、高齢者薬物治療適正化研究グループから「広島県に続いてブラウンバック運動を試してみないか」とのお声掛けをいただきました。当初忙しい薬局業務の合間に活動できるか不安もありましたが、高齢者薬物治療適正化研究グループの方たちが説明会を開催してくださったり、健康食品による中毒に関する研修会に参加した結果41名の薬剤師がブラウンバック運動に参加することになりました。患者さんの服用薬調査は41の薬局で実施され、2010年10～12月の3カ月間で51名の回答を得ることができました(図1)。

患者さんの服用薬調査を実施する前に、4カ所の地域イベントでアンケートにより市民の意識調査を行いました。(図2)

● CMで認知度の高い商品が上位 ●

市民の意識調査では①サプリメントを服用する人の割合は処方薬を服用している人に高い傾向 ②サブリ

図1 土浦地区ブラウンバック運動

- 実施期間:2010年10月～12月(3カ月間)
- 調査対象:41薬局の利用者51人
- 調査場所:薬局利用者、在宅、ケアハウスなど
- 平均年齢69.6歳、中央値73歳、最小値24歳、最大値92歳
- 男性21.6%

受診医療機関の数(現在)			現在かかっている疾病(複数回答)		
0	5	9.6%	高血圧	31	60.8%
1	26	51.0%	高脂血症	16	31.4%
2	14	27.5%	胃炎・胃潰瘍	12	23.5%
3	2	3.9%	糖尿病	10	19.6%
4	2	3.9%	骨粗鬆症	9	17.6%
無回答	2	3.9%			

メントと処方薬を両方服用する人は年齢が高いほど多い ③かかりつけ薬局の有無にかかわらず38%の人が「サプリメント・処方薬・OTCの飲み合わせについて調べてほしい」と回答した、という結果が得られました。患者さんの服用薬調査では、最も多かった処方薬はメチコバル®とディオバン®, OTCでは目立つものはありませんでしたが、サプリメントにおいては広告でよく目にするブルーベリーやコンドロイチン系のサプリメントを服用する方が多く、こうした割合は広島での調査結果とほとんど変わりませんでした。サプリメントそれぞれの成分を調べると同じビタミン剤を含むものが多く何種かのサプリメント併用ではビタミン服用過多になる可能性があること、サプリメントも医薬品と同じように服用には注意が必要であることなど患者さんに注意を促すことができました。こうしたことも運動の一つの成果だと思っています。

● 重複相互作用の危険性が多数 ●

服用薬についての調査(図2)から浮かび上がったことは、重複投与・相互作用の危険性が非常に大きいという事実でした。血圧降下剤や糖尿病薬との併用注意

図2 薬局薬剤師による調査項目の例。回答の負担をできるだけ減らすためにチェックボックスなどを多用

アンケート調査項目とイベント開催場所		イベント開催場所			
アンケート項目	回答の種類	健康まより 土浦市	さわやかフェア 阿見町	老人会 土浦市 婦人会 阿見町	かすみがうら市 高齢者大学 土浦市
年齢	5択[40代以下/50代/60代/70代/80代以上]	○	○	○	○
医師から処方された薬を飲んでいる	2択[はい/いいえ]	○	○	○	○
健康食品・サプリメントを飲んでいる	2択[はい/いいえ]	○	○	○	○
(前質問「はい」の方のみ) 何種類飲んでいるか	整数	○	○	○	○
薬と薬・健康食品・サプリメントの 飲み合わせについて不安はある					○
飲み合わせについて調べて ほしいと思う	2択[はい/いいえ]	○	○		○
お薬手帳を持っている・活用している	2択[はい/いいえ]	○	○	○	○
お薬手帳は1冊に全ての医療機関の 薬を記入している	2択[はい/いいえ]	○	○	○	○
医療機関からの薬は どこでもらいたいか	4択[病院/医療機関前/ 自宅近く/その他]	○	○	○	○
ジェネリック医薬品を使用したい	2択[はい/いいえ]	○	○	○	○
ジェネリック医薬品に 変えてもらったことがある	2択[はい/いいえ]	○	○		○
在宅に薬剤師が訪問し 服用支援できることを知っている	2択[はい/いいえ]	○	○	○	○
薬局で「薬歴」を記録してもらっている	2択[はい/いいえ]	○	○		○
「かかりつけ薬局」を持っている	2択[はい/いいえ]	○	○		○

を行った例が最も多く、中には皮膚科と耳鼻科で同様の抗アレルギー剤が処方されている例もありました。こうしたことはお薬手帳などを用いて医師または薬剤師に現在服用している薬を伝えることの重要性が患者さん側に認識されていない、「お薬手帳の有効活用は自分の身を守るもの」という考え方がまだ十分に認知されていない、主治医に対して他の病院にも通っている事実を伝えにくい日本人特有の気質があること、などにも原因があると思います。米国で3,000人を対象に行われた同様の調査では、相互作用が発生する薬物の組み合わせが46通り、重要な相互作用発生の可能性は11通りも見られています。また薬剤師にとっては、患者さん自身が記入するお薬手帳の内容を鵜呑みにすることは非常に危険であるという認識ができたことも大きな成果だったと示されています。

● ブラウンバック運動の成果 ●

今回のブラウンバック運動の成果は ●患者さんの薬識や使い方を認識できること ●注意を要する高齢者や精神疾患を有する患者さんを認識できること ●処方薬とOTCの併用などを医師へ指摘できること ●服薬コンプライアンスを改善できること ●薬剤関連問題の早期発見と対策に活用できること ●患者さん側の満足度アップにつながる など挙げられます。問題点としては ◆参加薬剤師の確保が難しいこと ◆医師の理解やフィードバックを得にくいこと ◆薬剤師のパフォーマンス評価が難しいこと などが挙げられるでしょう。

高齢者薬物治療適正化研究グループの全面的な支

図3 ブラウンバック運動ホームページ



<http://brownbag.umin.jp/>

図4 日本薬剤師会のホームページ内『ゲット・ジ・アンサーズ』



<http://www.nichiyaku.or.jp/action/?cat=1638>

支援をいただき展開した今回のブラウンバック運動は、事務局を持たない地域薬剤師会には少し負担はありましたが、薬剤師の職能アップに直結する成果を得ることができ、大変満足しています。

また各製薬会社にはOTC薬との併用などに関する資料請求で大変お世話になりました。各社共に非常に迅速な対応をいただき感謝しています。

● 地域とともに歩む薬剤師会として ●

今回のブラウンバック運動を通して改めて「くすりの正しい使い方」を地域に啓発するのは薬剤師の責務であると認識いたしました。土浦薬剤師会のこうした経験を、今後も各種のイベントの機会などに応用し、さらに調査を重ねてより大きな母集団の形成につなげていきたいと考えています。また、地域の老人会の口コミ効果にも大いに注目しています。ワーファリンと納豆、カルシウム拮抗薬とグレープフルーツの食べ合わせ例など、ここから広まる情報も非常に多いのです。薬剤師側から正確な情報を発信することに留意しながら、こうした場を有効に活用し、地道な地域貢献活動を続けていきたいと思っています(図3、4)。

第3回「くすり川柳コンテスト」作品募集

～くすりは正しく飲んでこそ「くすり」です～

くすりの適正使用協議会は、「健康と薬の週間」(10月17日～10月23日)を機に、2011年10月17日(月)より「くすりの正しい使い方」をテーマにした川柳を全国から募集する、第3回「くすり川柳コンテスト」を開始しております。

くすり川柳とは…

当協議会設立20周年を記念して始まったくすり川柳。

“一人でも多くの方に、くすりを正しく使うことの大切さについて考えるきっかけになってほしい”との願いをこめています。

昨年は全国から9,743句の応募があり、高齢とともに増えるくすりの種類、外出時のくすりの携帯や飲み忘れ、苦いくすりを子どもに飲ませる母親の工夫な

ど、日常生活におけるくすりとの関わりを様々な視点から詠みあげた、感性豊かな川柳が集まりました。

受賞作品は東京新聞で発表されるほか、当協議会が行うくすりを正しく使っていただくための啓発活動のPRに用います。

ご応募者の方、その作品を読まれる方が、これを機に“くすりを正しく使用することの大切さ”を意識していただけたら嬉しく思います。どうぞふるってご応募ください。

★第2回くすり川柳コンテスト入賞作品(一部ご紹介)

*テーマ:「くすり」

子供部門

最優秀賞

「一つぶが 大きく見えた あのころは」

東京都 宮坂 夏実さん(15歳)

優秀賞

「薬ギライなおすくすりはないかしら」

新潟県 田中 蘭さん(10歳)

一般部門

最優秀賞

「薬箱 拡大鏡が 巾きかせ」

茨城県 石田 美佐江さん(53歳)

募 集 要 項

■テーマ

第3回「くすり川柳コンテスト」のテーマは、「くすりの正しい使い方」です。日常生活における「くすりの正しい使い方」について5・7・5の川柳にして投稿してください。

■応募条件

全国の小学生以上の方が応募できます。

①子供部門(中学生以下)

②一般部門(高校生以上)

※オリジナルの未発表作品に限ります。

※二重投稿や他の作品との類似がみられた場合は、受賞を取り消すことがあります。予めご了承ください。

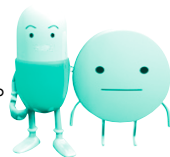
※応募作品は返却いたしません。

※入選作品の著作権及び出版などの2次利用については、くすりの適正使用協議会に帰属いたします。

※応募者の個人情報は、くすりの適正使用協議会で管理・使用・保管します。

■応募方法

応募部門、作品(1人につき、5句まで)、氏名、年齢、性別、住所、連絡先(電話、もしくはE-mail)を応募フォームに入力し、ホームページからご応募ください。



◇応募先:くすりの適正使用協議会ホームページ
<http://www.rad-ar.or.jp>

◇応募締切:2011年11月30日(水)

■入賞作品の選考

ご応募頂いた作品の中から、選考委員による審査を実施し、各部門から最優秀賞1名・優秀賞1名・佳作賞3名、両部門より特別賞若干名を選定。入賞者へは、審査結果を郵送にてお知らせいたします。

選考委員:川柳有識者、くすりの適正使用協議会

■賞品

各部門より、最優秀賞1名・金1万円／優秀賞1名・金5千円／佳作賞3名・金3千円を謹呈。両部門より、特別賞若干名・QUOカード(1千円)を謹呈。

※入賞作品は、「くすり川柳コンテスト」ホームページ上で発表します。

一般の方のお問い合わせ先

くすりの適正使用協議会「くすり川柳コンテスト」係
TEL:03-3663-8891
(午前10時～午後5時 土・日・祝日を除く)

掲載紙(誌)Web(7月~9月)

タイトル	掲載紙	掲載日
ファルマコビジランス分野でのクライシス・マネジメントの現状	Credentials	2011.7
(寄稿)育薬の風 -RAD-AR-	JPMA News Letter	2011.7
くすりの授業(4) 中教審が「くすり教育」推進を提言	医薬・健康ニュース	2011.7
「くすり教育」の進め方学ぶ 駿河地区	静岡新聞	2011.7.4
被災経験もとに医薬品供給体制の見直し提言	日刊薬業	2011.7.6
被災地で「お薬手帳」大活躍、日ごろから一元管理・情報共有を	MTPPro	2011.7.6
「新聞方法で薬物療法の阻害も」	MTPPro	2011.7.7
災害時の医薬品供給、卸活用を	化学工業日報	2011.7.8
RAD-AR協議会 中期計画で「生まれ変わり」宣言	RIS FAX	2011.7.14
適正使用協 5年間の中期計画を策定、組織改革も	日刊薬業WEB	2011.7.15
薬のリテラシー育成を 新たな目標共有し進化へ	薬粧流通タイムズ	2011.7.15
適正使用協 5年間の中期計画を策定、組織改革も	日刊薬業	2011.7.19
初めて組織体制変更 会員対象の拡大を図る	薬事日報WEB	2011.7.19
災害時の「薬」 種類知り複数箇所に情報	産経新聞	2011.7.19
東日本大震災で活躍した「おくすり手帳」の重要性やメディアが果たす役割などについて勉強会を開催	BIGLOBE	2011.7.19
東日本大震災で活躍した「おくすり手帳」の重要性やメディアが果たす役割などについて勉強会を開催	マイライフ手帳@ニュース	2011.7.19
東日本大震災で活躍した「おくすり手帳」の重要性やメディアが果たす役割などについて勉強会を開催	livedoorニュース	2011.7.19
初めて組織体制変更 会員対象の拡大を図る	薬事日報	2011.7.20
被災地の薬剤師活動と課題を報告	薬局新聞	2011.7.20
自分の薬、覚えていますか? 服薬情報しっかり管理を	共同通信	2011.7.23
自分の薬、覚えていますか?	熊本日日新聞	2011.7.23
自分の薬、覚えていますか 服薬情報しっかり管理を	神奈川新聞	2011.7.24
服薬情報 しっかり管理を 災害時の混乱に備えて	福島民法	2011.7.25
厚労省検討会 資料館設立で意見交換	薬事日報	2011.7.25
災害時に備え服薬情報管理を	京都新聞	2011.7.26
来年度中学の保健体育「新学習指導要領での薬の正しい使い方」薬剤師研修会開く	毎日新聞(福岡版)	2011.7.29
来年度中学の保健体育「新学習指導要領での薬の正しい使い方」薬剤師研修会開く	毎日新聞(筑後版)	2011.7.29
自分の薬、覚えていますか 服薬情報しっかり管理を	千葉日報	2011.7.31
自分の薬、覚えていますか 災害に備え管理を	徳島新聞	2011.7.31
「第2回くすり川柳コンテスト」結果発表	MIL	2011.8
医薬品の市販後安全性監視のよりよい体制とは	Credentials	2011.8
「起死回生」狙う適正使用協議会 後発品、OTC薬を巻き込む「新機軸」への挑戦	医薬経済	2011.8.1
災害に備え、服薬情報しっかり管理	山梨日日新聞	2011.8.1
服用薬の情報しっかり管理 災害時の混乱・紛失に備えよう	中国新聞	2011.8.1
自分の薬、覚えていますか? まず「お薬手帳」で把握	長崎新聞	2011.8.1
災害に備え管理見直しを 自分の薬名覚えていますか	神戸新聞	2011.8.1
自分の薬覚えておこう 情報の分散管理を	河北新報	2011.8.3
災害時に必要な薬確保 「お薬手帳」の携帯を	岐阜新聞	2011.8.8
幅広い分野から会員募り組織改革へ GEやOTCメーカーも視野	薬局新聞	2011.8.10
医薬品の知識 保健主事が研修	上毛新聞	2011.8.13
自分の薬の名前覚えていますか?	中部経済新聞	2011.8.17
服薬情報しっかり管理 災害時の混乱に備えて	埼玉新聞	2011.8.17
覚えていますか?自分の薬 「お薬手帳」常時携帯を	下野新聞	2011.8.19
「くすりの教育」を研修 夏休み、先生も勉強	桐生タイムス(夕刊)	2011.8.22
服薬情報 分散管理を 災害時対応遅れ症状悪化も	新潟日報	2011.8.22
自分の薬、覚えてる? お薬手帳身に付けて	岩手日報	2011.8.24
レジストリの活用で、幅広い分野の情報収集を	Credentials	2011.9
自分の薬、覚えていますか? 服薬情報しっかり管理を 災害時の混乱に備えて	紀伊民報	2011.9.3
まずは「くすり教育」始めてみて 桐生市・みどり市保健主事合同研修会	日本教育新聞	2011.9.26

出版物紹介



- 書 名 「ファーマコビジランスにおけるシグナル検出の実践 CIOMS Working Group VIII報告」
- 監 訳 くすりの適正使用協議会
- 発 行 有限会社 レーダー出版センター
- 発 売 丸善出版株式会社 TEL 03-6367-6030
- 定 価 4,725円(税込)
- ISBN 978-4-9902064-6-0
- 内 容 ファーマコビジランス活動の基本となる医薬品の安全性シグナルの検出、シグナルの優先順位づけ、シグナルの評価を全体的に管理するための方法、考え方をまとめたものです。また、シグナル検出が安全管理のモニタリングの重要なツールであることも紹介されています。

詳細はくすりの適正使用協議会ホームページからご覧ください。

http://www.rad-ar.or.jp/03/12_center/12_booksitiran.html

RAD-AR(レーダー)って、な～に?

RAD-ARは、医薬品のリスク(好ましくない作用など)とベネフィット(効能・効果や経済的便益など)を科学的に評価・検証し、その結果を社会に示すことで医薬品の適正使用を推進し、患者さんに貢献する一連の活動のことです。

イベントカレンダー

◆活動報告(2011年7月～9月)

- 2011.7.2 福岡県薬剤師会 くすり教育出前研修(福岡)
- 2011.7.3 静岡県薬剤師会中部地区 くすり教育出前研修(静岡)
- 2011.7.5 第1回メディア勉強会(東京)
- 2011.7.7 薬剤疫学セミナー Beginner Course(東京)
- 2011.7.13 第38回通常総会 第28回理事会(東京)
- 2011.7.14 薬剤疫学セミナー Beginner Course(大阪)
- 2011.7.21 第7回薬害を学び再発を防止するための教育に関する検討会
- 2011.7.23～24 第14回日本医薬品情報学会総会・学術大会
「注射版くすりのしおり®利用に関するアンケート調査」のポスター発表
- 2011.7.28 千葉県市原市養護教諭会 くすり教育出前研修(千葉)
- 2011.7.31 静岡県薬剤師会西部地区 くすり教育出前研修(静岡)
- 2011.8.4 京都府教育委員会京都市立中学校教育研究会保健部会(京都)
- 2011.8.4～5 全国養護教諭研究大会(佐賀)
- 2011.8.8 群馬県桐生市教育委員会保健主事部会 くすり教育出前研修(群馬)
- 2011.8.10 神奈川県学校保健研究会 くすり教育出前研修(神奈川)
- 2011.8.23 福井県越前市養護教諭保健研究会(福井)
- 2011.8.27,9.3・10・17・24 教育研修セミナープロトコル作成2011(東京)
- 2011.9.4 新潟県学校薬剤師会 くすり教育出前研修(新潟)
- 2011.9.14 長野県下伊那教育会 くすり教育出前研修(長野)
- 2011.9.15 薬剤疫学セミナー Senior Course
- 2011.9.30 埼玉県越谷市薬剤師会 くすり教育出前研修(埼玉)

◆活動予定(2011年10月～12月)

- 2011.10.12 第2回メディア勉強会(東京)
- 2011.10.17 平成23年度下期くすり教育アドバイザー定例会(東京)
- 2011.10.21 熊本県八代市薬剤師会学校薬剤師部会 くすり教育出前研修(熊本)
- 2011.10.23 くすりと健康フェアかわさき2011 シンポジウム(横浜)
- 2011.10.26 練馬区学校保健研究部 くすり教育出前研修(東京)
- 2011.10.28 青森県上北郡東北町養護教諭部会 くすり教育出前研修(東京)
- 2011.10.28 第5回「くすりのしおりクラブ」担当者会議(東京)
- 2011.11.7～8 ファルマコビジランス教育研修センター
- 2011.11.11～12 薬剤疫学セミナー Intensive Course
- 2011.11.12 第58回日本学校保健学会 口頭発表(愛知)
- 2011.11.26 子どもとためず環境まつり(東京)
- 2011.12.1～2 平成23年度コミュニケーション研究会(大阪)

当協議会の詳しい活動状況(RAD-AR TOPICS)と、RAD-AR Newsのバックナンバーは、当協議会ホームページよりご覧頂けます。

<http://www.rad-ar.or.jp>

編 集 後 記

協議会の総会後の懇親会で、臨床試験での薬剤統計学をわが国に導入し浸透・啓発に活躍された著名な先生と懇談する機会を得た。

3/11、先生は学会会場の東京秋葉原から神奈川県横浜市のご自宅まで徒歩で帰られたと聞いた。この距離は、何kmあるのだろうか?想像しがたい。その健脚に驚いた。と同時に一刻も早くご家族の安否と一時でもご家族と過ごしたいという先生のご家族への深い

愛情が感じられた。震災に遭われた人々・国民全員の3/11の同じ感情であろう。震災や放射能被害に遭われた子供たちのことがテレビで放映されている。我々がはかり知れないショックや苦勞・苦痛を経験したであろう。しかし、それにひるむことなく、目を輝かせ新しい物を見、新しい経験を重ねている映像を見ていると、この子供たちの将来は大丈夫だと確信する。日出る国の誇りをもった民族である我々は、前を見据えた一歩を歩み始めたのだと。(K.U)

RAD-AR活動をささえる会員

●企業会員 20社 (五十音順)

アステラス製薬株式会社 アストラゼネカ株式会社 エーザイ株式会社
MSD株式会社 大塚製薬株式会社 キッセイ薬品工業株式会社
協和発酵キリン株式会社 興和株式会社 サノフィ・アベンティス株式会社
塩野義製薬株式会社 第一三共株式会社 大正製薬株式会社
大日本住友製薬株式会社 武田薬品工業株式会社 田辺三菱製薬株式会社
中外製薬株式会社 日本新薬株式会社 ノバルティス ファーマ株式会社
ノボ ノルディスク ファーマ株式会社 Meiji Seika ファルマ株式会社

●個人会員 2名 (五十音順・敬称略) 大野 善三 三輪 亮寿

RAD-AR News Vol.22 No.3 (Series No.96)

発行日：平成23年10月

発行：くすりの適正使用協議会

〒103-0012

東京都中央区日本橋堀留町1-4-2 日本橋Nビル8階

Tel.03-3663-8891 Fax.03-3663-8895

<http://www.rad-ar.or.jp>

E-mail:info@rad-ar.or.jp

制作：日本印刷(株)